

出動！千歳の消防車

千歳市消防署では、各種災害に迅速かつ的確に対応するべく、随時、消防車両の更新整備を行い、消防力の維持・強化に努めている。
 本記事では、千歳市消防署が有する消防車両の一部をご紹介します。火災現場や救助現場の最前線で活躍する消防車両の姿を、消防士の解説でお送りする。



解説：齊藤 消防士長

祝梅出張所

千歳市消防署の梯子車は、平成25年に導入され、祝梅出張所に配備されている。市内の中高層建物などに対応するため、40メートル級のはしごを装備しており、地上4階以上の建築物で発生した火災や航空機火災などで出動する。
 ほかに高所における救助活動やガス漏れ警戒など、用途はさまざま。はしごをただけでなく斜め下にも伸ばせるため、水難救助にも対応可能だ。
 自動的にはしごを水平に保つ「ジャイロターンテーブル」や、はしごに生じた揺れを瞬時に打ち消す制御装置など安全装備にも優れており、高度な技術を満載した、まさに特殊車両の最高峰といえるだろう。

はしご梯子車

車体の安定性を向上させる装置「アウトリガー」を展開し、はしごを伸ばす準備を整えた梯子車。数ある消防車両の中でも、別格の存在感を放つ。



車両データ

全長	1,064cm
全幅	249cm
全高	352cm
総排気量	8,860cc



はしごは5連構成で、地上40.4mまで伸長する。エレベーターのようにはしごを昇降するリフターを設け、高所から要救助者を連続的に救出できる。バスケットの定員は3名で、最大許容積載荷重は270kg。はしごの内部には伸縮性の送水管が配置されており、バスケットから放水することも可能だ。



はしごの根元にはターンテーブルが設置されており、これにより360°の旋回が可能。バスケット内とターンテーブル上操作台の2か所にはしごの操作基盤があり、どちらからでも伸長操作ができる。

多種多様な消防車両が活躍中！



大型水槽車

最大10,000ℓの水を積載できる大型水槽を搭載し、水源がない地域や高速道路上での火災において活躍する。水槽からの放水はもちろん、河川や消火栓、他の消防車両とホースで接続し、取水しながらの放水も可能。大規模災害時には、給水車としても活動する。



解説：中藪 消防司令補

車両データ

全長	908cm
全幅	249cm
全高	293cm
総排気量	8,860cc

水量計は視認性に優れ、夜間でも水の残量が一目でわかる。



キャフス CAFS車

圧縮空気泡消火装置（Compressed Air Foam System）を搭載した水槽車。水と消火薬剤に圧縮空気を注入し、泡を生成する。水と比べて消火効果、再燃防止効果ともに向上しており、木材、紙、繊維などの普通火災のほか、自動車火災など水だけでは消しにくい火災に対し非常に有効。

富丘出張所



泡は水と比べて流れにくく可燃物に密着するため、消火効率に優れている。消火薬剤は石けんと同じ天然成分由来の泡を使用しているため、水道水や河川において生分解性が高く、環境に優しい。



解説：榎本 消防士長

車両データ

全長	735cm
全幅	236cm
全高	307cm
総排気量	5,120cc

化学車

車両データ

全長	893cm
全幅	249cm
全高	330cm
総排気量	8,860cc

水2,000ℓ、消火薬剤1,600ℓを積載できる千歳市消防署唯一の大型化学消防車。ガソリンや灯油など、水での消火が難しい油火災に対応する車両で、燃えているものを消火薬剤の泡で覆い、空気を遮断することで消火する。車両側面から霧をバリアのように噴射し、輻射熱から車体や隊員を守る自衛噴霧機能を有する点も特筆ポイントだ。

西出張所



車体の上部に2丁の放水銃を装備。毎分3,000ℓの放水が可能で、最大射程距離は50m（水のみの場合）。



解説：山口 消防士

レスキュー活動の必需品
救助工作車

全国の消防本部には、救助隊と呼ばれる救助のスペシャリストたちがいる。火災や交通事故といった身近に起こりうる災害はもちろん、水難救助や山岳救助など、さまざまなレスキューシーンに対応する。

救助の現場では、人の手で動かさないほど重い障害物や、開かなくなった車のドアが救助隊員の前に立ちふさがれることも珍しくない。こういった状況に対しては、ツールを駆使して迅速に対処することが急務であり、各種の装備や救助器具を備えた「救助工作車」は欠かせない存在だ。

千歳市消防署では、「II型」と呼ばれる救助工作車を導入し運用してきたが、今年、先代車両の運用年数が更新基準の18年を経過した。そこで新たに導入したのが、今回紹介する車両だ。

救助ツールを満載
北国ならではの特色も

救助工作車の基本である、クレーン、ウインチ、照明装置の3点を装備。先代と比較して車両全長は1m以上短くなっているものの、エンジンのダウンサイジングや積載スペースの効率的な活用、積載する資機材の

クレーン、ウインチ、照明装置
救助工作車の主要装備



ウインチ

車体の前と後ろに油圧ウインチを搭載。前は5トン、後ろは10トンの牽引能力を有する。



クレーン

アウトリガーを展開した状態から、車両後部の油圧式クレーンを作動。4段の伸縮式で、最大吊上げ能力は2.9トン。重量物の除去などに用いられる。



照明装置

投光器は車体屋根の上面に伸縮収納でき、リモコン操作により360°旋回可能で上下にも向きを変えられる。LEDの採用により照度も向上。



左右側面のシャッターを開けると、はしごやロープなどの一般救助用器具はもちろん、エンジンカッターやチェーンソーなどの切断用器具、ジャッキなどの重量物排除用器具が所狭しと並んでいる。収納庫の区画内は、棚で細分化できる構造になっている。

救助用ツールがギッシリ
収納庫の中身を拝見



カッター、スプレッダーといった交通救助などに用いる油圧式の大型資機材を、バッテリー型に変更した。従来はポンプと本体をホースで接続し、油を送ることで作動していたが、バッテリーの搭載によりこれらが一体化され、機動性が大きく向上。効率よく活動できるようになった。



千歳市消防署

解説：中敷 消防司令補

新車、登場！

各種の災害救助に必要なツールを積んでいる救助工作車。千歳市消防署では、今年5月18日から新しい救助工作車の運用を開始した。新型車両ならではの性能や、更新された救助用資機材のストロングポイントについて紹介する。

型化などにより、従来以上の装備充実度を実現した。

乗車定員は6人で、専門教育を受けた人命救助のプロフェッショナルであるレスキュー隊員が搭乗する。キャビン（車室）はハイルーフトタイプを採用し、広い空間を確保。天井までの高さが180cmほどある後部座席では、立ったまま空気呼吸器の装着が可能だ。

車両後部は収納庫となっており、省令で定められた60種類以上の救助用資機材を積んでいるほか、雪害への対応も想定してトレッキングポールやアルミスコップを備えている点に、北国ならではの特色がみられる。

千歳市消防署の誇りを胸に

車体側面に塗装が施された千歳市の市章には、「千歳を守る」の意味が込められているといい、中敷消防司令補は「千歳市消防署の誇りを感じながら活動できる」と語る。

導入にあたり、現場の意見も踏まえながら装備や資機材の検討を重ねた。千歳市消防署が長年培ってきた救助ノウハウが、この一台に凝縮されていると言っても過言ではない。

新しい救助工作車は、救助隊員とともにあらゆる災害に立ち向かうべく、今日も万全の準備を整えている。

救助工作車



車両データ

全長	798cm
全幅	238cm
全高	322cm
総排気量	5,120cc



ありがとう！
“先代”救助工作車



平成20年3月に導入され、18年以上にわたり救助現場の最前線で活躍してきた先代の救助工作車。今回の新型車両導入とともに、その役割を終えた。



千歳市の消防車特集

今回掲載した消防車両は、市公式YouTubeでも紹介しています。

